

オスカー・ワイルドの批評と歴史性——「解釈」をめぐって

司会・講師 金田 仁秀

講師 田中 裕介

講師 佐藤 元状

講師 北村 紗衣

コメンテーター 河内 恵子

1993年に出版された *Oscar Wilde Revalued* において Ian Small は、ワイルドの批評に対する二つの流れとして、19世紀の批評の伝統に対置させるものと、初期モダニズムの関心を予期させるものがあると述べたが、そのどちらにしてもワイルドの批評の歴史的な位置付けを試みるものであったと言えよう。そして、こうした傾向は近年より一層強くなっているように思える。このことは、例えば2013年に出版された二つの論集のタイトル、*Oscar Wilde in Context* と *Wilde Discoveries: Traditions, Histories, Archives* から示唆されるだろう。そこでは、ワイルドの批評に関して aestheticism, decadence, symbolism といった文学的事項に焦点を当てたものから masculinity, performativity, sexuality, gay といったより社会的、政治的な事象を絡めた議論までなされているが、いずれにしてもワイルドの批評を歴史的な観点から捉えようとする視座が伺える。こうした動向を踏まえて本シンポジウムは、ワイルドの批評を、創作背景から後のアダプテーションまで幅広く歴史的コンテクストと関連付けながら考察してみたい。その際、特にワイルドの批評における「解釈」、またワイルドの批評に対する「解釈」の問題に注目し、ワイルドの批評の面白さを、その特異性や意義とともに考える契機としたい。

クィアな創造の美学——ワイルド批評／思想における逸脱性

金田 仁秀（群馬大学准教授）

ワイルドの批評といって思い起こされるのは、一般的に *Intentions* に収められた論考、特に“The Decay of Lying”と“The Critic as Artist”だろう。しかしながら、雑誌や新聞に投稿していたもの、*The Woman's World*の編集長として書いたもの、また講演などもあり、その主題や形式は多岐に渡っている。しかも、それぞれにおける主張はその時々に関心や思考に影響を受けており、すべてを体系的に捉えることは難しい。さらには、一つの論考の中でさえ一貫性を欠くのがワイルド批評の特徴であると考えられる。そのため、例えば皮相的か真面目か、道徳的か不道徳的か、観念論か唯物論かといったように、ワイルドの批評全般にストレートな道筋を見出し、解釈しようとする試みは困難に直面する。こうした状況を踏まえて、私の発表では、服装、仮面、個性、芸術、行為といったものへの言及に注目しながら、矛盾や逸脱を産み出すものとして、時事性やコンテクスト、媒体といったある種、外的な要因と言えるものと、スタイルや思想自体に関する内的な要因とを探ってみたい。そして逸脱に満ちながら脱構築していくワイルド批評のクィアな創造の美学を明らかにしたい。

文献学者オスカー・ワイルド

田中裕介（青山学院大学准教授）

オックスフォード大学在学時代のワイルドの文学的活動については、詩篇『ラヴェンナ』（1878年）の刊行が有名である。一方で、彼がダブリンのトリニティ・コレッジ在学時から古典語において優秀な成績を収めたこともよく知られているが、結局彼は古典文献学を専門とする研究者として大学に残ることはなかった。しかし「歴史批評の勃興」（1879年）および大学在学時代の『ノートブック』に見られる彼の古典文献学への取り組みは、途中で挫折した試みである半面、その後の著作活動の大きな礎になったと判断できる。本発表では、新しい文献学的方法論に基づく人類学、言語学、聖書学の成果を幅広く摂取したワイルドが、『意向集』（1891年）に代表される批評的著作において、いかにその学知を活用したのかを検討する。その歴史解釈の文学的展開の特性を、フリードリヒ・ニーチェ『悲劇の誕生』（1872年）および折口信夫『古代研究』（1930年）との比較を通して明らかにすることも試みたい。

ワイルドが肝心？——もうひとつのヘリテージ映画

佐藤 元状（慶應義塾大学教授）

イギリス映画史研究においては、イギリスの文化的な遺産を売り物にする 1980 年代以降の一連の映画サイクルを「ヘリテージ映画」と呼ぶのが習わしとなっている。このヘリテージ映画の主要商品が英文学の古典的作品のアダプテーションから成り立っているのは、言うまでもない。ヘリテージ映画産業の追い風を受けて、1970 年代に一度ピークを迎えたワイルドのアダプテーションは 1990 年代の終わり頃からふたたび息を吹き返す。オリヴァー・パーカーの『理想の結婚』（1999年）、『アーネスト式プロポーズ』（2002年）は、その一例である。だがワイルドのアダプテーションにはもうひとつの「ヘリテージ映画」の文脈があった。それは第二次世界大戦前後のイギリス映画の黄金時代である。ナショナリズムが文化的生産物に直接的な影響を及ぼす 1940 年代からその余熱が残る 1950 年代初頭にかけて、「原ヘリテージ映画」とも呼ぶべき一連の映画サイクルが誕生している。ローレンス・オリヴィエの『ヘンリー五世』（1944年）と『ハムレット』（1948年）、デヴィッド・リーンの『大いなる遺産』（1946年）と『オリヴァ・ツイスト』（1948年）は、こうしたイギリス映画のルネッサンスの一例だ。ワイルドもこの流れに乗り遅れてはいない。アレグザンダー・コルダの『理想の夫』（1947年）とアンソニー・アスキスの『真面目が肝心』（1952年）である。本発表では、コルダとアスキスのキャリアを紹介した上で、彼らの「原ヘリテージ映画」の戦略について、とりわけ演劇作品の商品化の戦略について考察していく。

ワイルドが言うとおりにワイルドを解釈することはできるか？——アナーキーと〈著者の意図〉の間で

北村 紗衣（武蔵大学准教授）

オスカー・ワイルドはしばしば「著者の意図」中心主義に疑問を投げかけた批評家と見なされ、その点においてはロラン・バルトなど 20 世紀の批評を先取りする存在であると考えられている。たとえば『ドリアン・グレイの肖像』を弁護する 1890 年 7 月の書簡では「芸術が本当に鏡に映しているのは、人生ではなく、見ている人なのです」と述べ、著者の意図よりはむしろ読者や観客の解釈の余地を強調する傾向がある。

一方でワイルドの劇評や書簡には、作品、とくに戯曲を著者本人に属する個人的な表現と見なす記述が見受けられる。ワイルドは 1885 年のシェイクスピア批評で、シェイクスピアが自分の芝居をどのように上演したいと考えていたかについて議論し、後年の『獄中記』では自らが「芸術において最も客観的な形式として知られている演劇を個人的な表現の方法にした」と述懐している。クイア批評などにおいては、このような発言をふまえて個人的な作品として『サロメ』などの戯曲を分析する傾向も根強い。

本発表は、読者の自由な解釈を奨励する一方、自らの個人的な意図を作品に盛り込もうともしていたワイルドが、解釈のアナーキーと著者によるコンセプト重視というふたつの批評的方針の間でいかにバランスをとろうとしていたかについて分析する。こうした観点から批評を読み解く中で、個人主義やアナキズムといったワイルドの政治的見解と文芸批評との関連も明らかにしていきたい。